

研究課題	小学校理科におけるイプサティブ評価の実践的研究		
氏名	渡辺 理文	所属	教職大学院
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること			
<p><b>【研究成果の概要】</b>（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）</p> <p>形成的評価は広く知られた評価方法である。この形成的評価も含まれる「学習のための評価（assessment for learning）」は、「目標に準拠した（criterion-referenced）規準」からの判断と「個人に準拠した（student-referenced）規準」からの解釈のどちらも必要とされる評価方法である。学習のための評価の目的は、学習改善と指導改善である。その手がかりを得るために、学習者の到達度を判断するだけではなく、一人一人の既有知識や学びの履歴に即した学習者の解釈が必要になる。しかし、現在行われている学習評価は、目標に準拠した規準からの判断が中心になっている。同様に、形成的評価の実践に関しても目標に準拠した規準からの判断に基づいたフィードバックに留まっている。上述の問題を解決するために、本研究では個人に準拠した規準からの解釈である個人内評価・イプサティブ評価に焦点を当てた。個人に準拠した規準と目標に準拠した規準の併用による、学習改善と指導改善を目指し、その事例を示すことを目的にした。</p> <p>目的のサンプリングにより、授業者を杉野さち子教諭（お茶の水女子大学附属小学校）に決定した。理由は、授業者は第一著者との共同研究で教育評価の理論的方略を基に実践を行った経験があること、個々の見取りに基づいた学習改善や指導改善を実践していることから、個人に準拠した規準と目標に準拠した規準を併用する評価の実践が実現可能であると判断したためである。</p> <p>対象学級は授業者が担任している小学校第3学年1学級34名である。内容は「磁石の性質」とした。</p> <p>授業者と個人内評価やイプサティブ評価についての共有し、個人に準拠した規準と目標に準拠した規準を併用し、学習者個々を見取することを計画した。また、それに基づいて学習改善と指導改善を図ることを計画した。研究者は参与観察を行った。分析は、発話記録と板書、ノート、座席表の記述内容から、二つの規準から学習改善と指導改善が行われていたのかを分析した。</p> <p>授業は個の探究活動と全体での分かち合いが交互に行われる単元構成であった。目標に準拠した規準は主に学習指導要領に関わるものであった。加えて、学び方に関しては教師の願いが関わっていた。個人に準拠した評価基準は、過去のその子が規準となり、現在との比較で成長を捉えるものであった。</p> <p>J児とH児の探究について取り上げて説明をする。二人は「磁石に何が付くのか」を調べてまとめている。教師は目標が明確でありと捉えていた。しかし、カイロと砂鉄への興味生まれ、とりあえず砂鉄を扱いたいという気持ちが先行しており、教師は目標が不明確になったと見取りをした。つまり、過去の二人の状態と現在の二人の状態を比較し、目標か明確→不明確になったと見取った。フィードバックとして、「砂鉄で何を調べたいのか」を発問し、目標を明確にする関わりを行った。</p> <p>以上は抽出した事例であるが、このようなイプサティブ評価をすべての子どもに対して行うことで、探究活動を支援している様子が見られた。目標に準拠した評価からの判断と個人に準拠した評価からの解釈を使い分けながら、学習改善と指導改善を行っている事例を示すことができた。</p>			
<p><b>【研究成果発表方法】</b></p> <p>渡辺理文・杉野さち子（2026）「個人に準拠した規準と目標に準拠した規準の併用の可能性を探る」『日本理科教育学会全国大会発表論文集』第25号，54。（日本理科教育学会オンライン全国大会2026発表賞を受賞）</p> <p>渡辺理文・杉野さち子（執筆中）「小学校理科におけるイプサティブ評価の実践的研究」『理科教育学研究』（日本理科教育学会の論文誌への投稿を予定している）</p>			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。